

近世

第9章 幕藩体制の動揺 1. 社会変容と対外危機 (3) 文化・文政期の対外的危機

鳥取にもたらされた珍品

—阿蘭陀渡りの駱駝の事—



「阿蘭陀渡りの駱駝の図」『因府歴年大雑集』第15巻 (鳥取県立博物館蔵)★

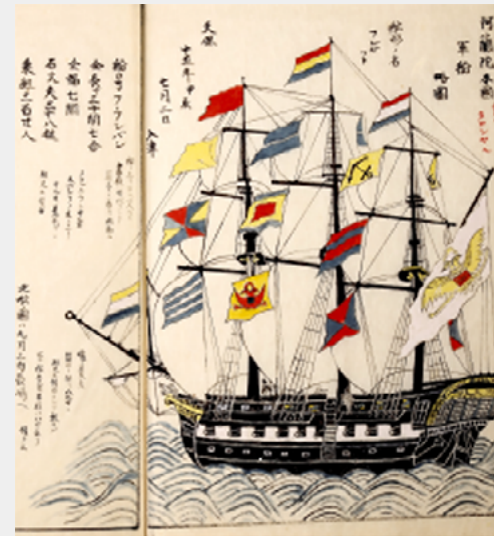
【釈文】
 「此一図を画て家の内に張おけ
 ハ、疫病、ほうそう、はしか、悪事、
 さい難、まぬかれ、一度見る時
 ハ不老長生うたがひなきこと、
 寄代の靈獣也、文政四日己六月秋、
 紅毛人長崎へ持渡ル、夫より暫
 く大坂において諸君子入見覽に、
 諸国に其評判あまねく響、依之、
 此度江戸両国ニおあて、諸人入
 尊覽、耳目驚し、未だ談話の其
 一ツとする事しかり。」

※「一」部分は上図では省略

【意訳】
 前略…この絵を家の中に貼って
 おけば、疫病、疱瘡、はしか、
 悪事などの災難から免れ、一度
 見れば不老長寿になれる世にま
 れな靈獣である。文政四年六月
 にオランダ人が長崎に連れてき
 た。その後大坂に行き、評判が
 高まり江戸まで行くこととなっ
 た。…後略

解説

まつだいらさだのぶ まつだいらさだのぶ かんせい
 松平定信が進める寛政の改革の大きな課題の1つとして、外国から
 の危機への対応があった。1792(寛政4)年、ロシア使節ラクスマン
 が根室に来航し、大黒屋光太夫 だいくやくやこうだゆう を届けるとともに通商を求めてきた。
 それを機にロシアをはじめ、イギリス、オランダそしてアメリカも
 幕府に通商を求めてくるようになった。この資料には、1824(文政4)
 年にオランダから長崎にもたらされた2匹の駱駝(ラクダ)の様子が
 記されている。外国船が日本に近づき、緊張状態が続いている時期
 でありながら、そのあおりを受けてやってきたラクダの生態・容姿
 とともに、当時の人々が「靈獣」としてあがめている様子や興味・関
 心を抱いている様子を見ることができる。



「阿蘭陀本国軍船略図」『因府歴年大雑集』第13巻 (鳥取県立博物館蔵)★ (担当：花原慧史)

参考資料

・鳥取県『新鳥取県史資料編 近世6 因府歴年大雑集』609頁(2019年)

★の写真は教育活動以外での無断利用や転載を禁止します。